

PPBS基礎研究に関する一考察

遠 藤 貞 一

PPBS基礎研究背景の1部

この研究は筆者の継年研究の1端の紹介である。

アポロ以後、1970年の初頭において、アメリカでは、国内的に大きな変化が始ったと云われている。

それは、1つは、アポロ月着陸以後、急にその政策を変えて、そのNASAの成果を、いかに国内に利用するかという問題と、とり組んだことである。そして今や、このNASAの成果の「引出し」は、世界各国のかくれたる動きとして、熾烈を極め始めたとも云われている。

併しこの背景には、ケネデーの月着陸声明と期を一にした、「PPBSのペンタゴン導入」の背景がある。そしてそれは、ジョンソン大統領に受け継がれ、1965年PPBSは米国の全州に指令された。これが「18年目に咲いた花」と云われ、従ってこの源流は、米国の第1次フーパー委員会頃、以前にあるものと見られる。

このアポロ計画も内容的に見ると、この源流の中の1つのプロジェクトに過ぎず、学術的にはSEでありSAであるのである。

そこでこの源流をふまえて、米国で現在最も問題になっているのは、「人間開発」の問題である。これは丁度数年前、大統領の諮問機関「マンパワー調査委員会」が発足し、委員会自体は昨年任務を終えて開散し、政府はこれをもとにして「人材開発法」とも云うべき法律制定にふみ切った。

併しこの内容こそ、現在アメリカにおける、否世界における最も注目すべき情報でなければならぬと考える。

それは1口に云えば「人類の21世紀における世界政策へのビジョンを打出したもので、注目すべき点は現在人類の有するすべての科学の学問の体系を破棄し、コンピューターを完全に利用した新しい社会に適合する学問の再構成を含むものである」とされ、この行方に、その「シンク・タンクの将来」を見ているのである。

このかくれたる「世界革命の発芽」をも云うべきものは、我が国においても「世界における最も深奥なる問題」として受取る必要があると筆者は考える。

我が日本の行くべき道は、この驚到すべき芽の方向に向って、1日も早く「民族の結集」を必要とするものとする。そしてそれは、ケネス・E・ボールディング教授の、閉じられた、自己

循環の地球政策の研究に集中すべきものと考ええる。

さてこのPPBSは、ジョンソンの指令以後また、丁度アポロ着陸の年度と期を一にして、漸く米国全州に行きわたった。併しそれはやっと全州に行きわたったという程度で、全般的にはまだ充分統一されておらず、試行錯誤を試みている州もあると云われている。

従ってPPBSの成果も、まだこれからのものであり、現在ではまだ未知のものであると云わざるを得ない。

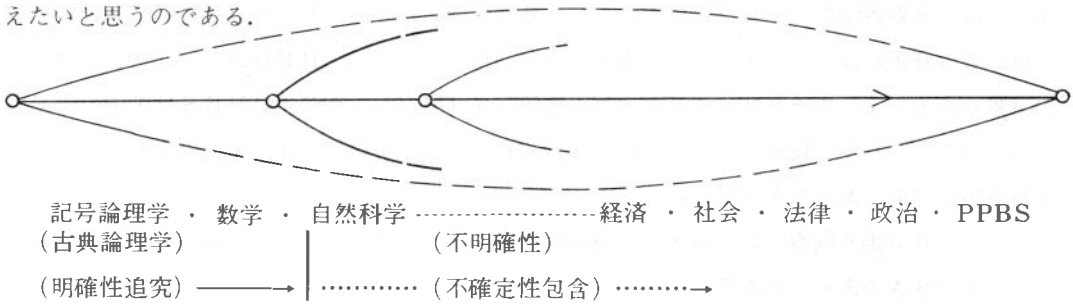
一方ケネス・E・ボールディング教授は、「経済学を越えて」ホメオスタシス理論を展開し、すべては狭い閉じられた遊星、地球の内部で処理しなければならぬ「哲学」について示された。

そこでこのPPBSもやがては「現在のPPBSを越えて」「地球国家運営の中核」に位置する時代がやってくるだろう。

この意味で筆者は、このPPBSを「或る意味での実学の頂点」と見做しているのである。

そして今これを——→の右端の頂点とするならば、左端の頂点として何を選ぶべきであろうか。

これについて筆者は、一応科学の立場としては、「古典論理学、乃至記号論理学」をそこに据えたいと思うのである。



これは丁度近代の革新的なる「方法や技術」がいつも戦争の落子として生れ、そしてそこにも「数学者の団」がその基礎を先駆乃至固めている「事実」—「OR, PERT, コンピュータ, SE, SA……」に倣うとすれば、我々は「その数学よりも奥の源流に遡る事が考えられるのである。

そしてこの仕事は特に図にも示された如く、数学及びその源流は一重に「その明確性」の追究を使命としたのに対し、PPBS側の実学は「その明確性を追究し乍らも、不明確性を包含しなければならぬ宿命を負っている」姿が見られるのである。

従ってこの体系で一番困難な問題は「その明確性から不明確性への転位、逆転位、混結等」の問題であろうと思われる。事実「SAや意志決定」においては、「その不明確さと複雑さの中の処理」に明け暮れている姿が見られるのである。

かくて若しも、より本格的にこの問題を追求するならば、数学より奥の、少くとも記号論理学の附近迄は後退し、数学を包含し、この流れにもまだ未踏の世界である「不明確性、不確定性」を包含した『疑似数学』を展開し、自然科学は勿論のこと、経済、社会、法律、政治も「のみ込んで」「越えたPPBS」へのアプローチが必要だと考えるものである。

そしてこの世界はまさに「どの科学に属するか区別の出来ない所謂インターデシプリナリー」なものになる筈である。

そして恐らくこの地盤には、現在のものより遥かに高度のコンピュータが位置せざるを得ないものと考えられる。

ここに「我々のこれ迄の学問体系が、バラバラにされ破棄されて「新しい哲学」で「再構成」される姿を見る筈である。

そしてここで出て来たその「新しい哲学」こそ我々の先づ求むべき「新らしきもの」でなければならない。

否これは、新しいというよりも、我々が今日迄築いて来た全哲学の「結論」であってもよい。

即ちこれをわかり易く云えば、1番大切なことは、「我々は何のために、何を目標として、如何にシステム化されねばならないか」である。そしてこの目標に対しては、恐らく「地球システムとしての人類憲章」が打立てられねばならないであろう。

この場合、地球上の諸国家は、共存型か、単一の地球国家の形態をとるかについては、これは軽々には断じ難い。併し結局は後者の形態をとるべきものとも考えられる。それは地球全体はやはり「1つのシステム」としてまとめるべきことが「システムの本質として要請される」と考えられるからである。

— 我々はここに、現時点の意味を深く洞察して「ここに深き常識と最先端の哲学に負う「暫定哲学」を打ち立てて「すべては地球全体のシステムとして」すべてのものを調整し、発展させなければならないものと考ええる。

問題は極めて困難にして深刻である。我々の行くべき道としてはあまりにも日暮れて道遠き感はあるにしても、止まるわけにはいかないものと考えられる。

1970年の秋の1日に誌す。継年研究4年にして。